

え抜き東京人が始めて石狩平野でも見れば其廣漠なる風景に感心して無暗と大陸的だと認めるだらうが實は關東の五分の一にもたらぬ。地圖上で見た關東平原はいかにも平原だが中野から國分寺邊へかけての武藏野は小さく仕切つた畑と森と人家で三町四方も見通しがきかない。滿州平原とは似てもつかない鳥國的のせよ、こましさを感ずる。かく本書の二頁三頁にて多くの讀者には博士の考へを大した隔りを思はせる余巻を通じての博士の説は地學者から人類學者から史學者から夫々反對を受くべき性質のものが多いやうである。であるから好學の士は是非一讀して置かねばならない本である。(J.M.生)

### 朝鮮部落調査特別報告第一冊(民家)

本報告書は朝鮮總督府の發行に係り今和次郎氏の朝鮮民家の調査研究を發表したものである。本文七十八頁、圖版四十一葉ありて圖版は甚だ鮮明である。此の外第三十一圖に至る挿圖があつて圖版及挿圖の多くは今氏の美しきスケッチである。今氏は朝鮮の住家を甚しく美しいものと考へられた。此の點は一篇の素へ觀光者と全く趣を異にする點である。大體に於て民家を北方型と南方型ろ一般朝鮮型として分けられた様であつて、約一ヶ月の研究旅行に依つたものであるから幾多の面白き問題を提出してはあつたが未だ全辭に互つたある一事項の分布を述べるとには至つて居ない。従つて本報告で朝鮮民家の構造や其住居としての意味は明かにされ得るが未だ地理學的の研究まで達して居ることは云はれない。然し慶尙北道の金泉の町にする關觀察

の如きは、人文地理として甚だ面白いものであつて其の下級住家が町の四周の高い位置にあることを明瞭な圖式で示されて居るところなどは一般地理學者の學ぶべき點であると思へる。猶本書の記述の仕方が甚だ自由であつて美しい言文一致でかゝれて居るのは役所の出版物として稀に觀る面白さを感じしめる、ある一部の記述は寧ろ散文詩とも云へる様な感情をかき表はしたものである。地學者は本書から如何に住家を愉快に且つ學問的に觀察すべきであるかを教へられる。(中村)

### 質疑應答

問 岩石研究の好參考書を御知らせ下さい。

答 本誌第一卷第三號「高等教員檢定試験の指定參考書に就いて」といふ表題の所に岩石の參考書の數種が既に擧げられてあります。然し質問者は恐らく此れ以外の書をも望んで居られるものと見做して、更に數種を紹介いたします。

岩石の成因に關して

- (1) Daly: Igneous Rocks and their Origin (1912) (大成岩)
- (2) Harker: Natural History of Igneous Rocks (1909) (大成岩)
- (3) Wolf: Der Vulkanismus (I-II) (1914及1928) (大成岩)
- (4) Grubermann: Kristalline Schiefer (1910) (變性岩)
- (5) Van Hise: Treatise on Metamorphism (1904) (變性岩)
- (6) Grabau: Principle of Stratigraphy (1918) (大性岩)

岩石學總論及び各論に關しては

- (1) Rosenbusch: Elemente der Gesteine (1910) (1922)
  - (2) Hach: Textbook of Petrology (I—II) (1914)
  - (3) Iddings: Igneous Rocks (I—II) (1920)
- 實驗岩石學に關しては
- (1) Johansen: Manual of Petrographic Methods (1918)
  - (2) Holmes: Petrographic Methods and Calculations (1919)
  - (3) Rosenbusch: Mikroskopische Physiographie der Mineralien und Gesteine (I—IV) (1921—1923)
  - (4) Iddings: Rock Minerals (1911)
  - (5) Johansen: Essentials for the Microscopical Determination of Rock-forming Minerals and Rocks (1922)
  - (6) Milner: Introduction to Sedimentary Petrography (1922)
  - (7) Lueck: Tabellen zur Gesteinskunde (1921)

### 編輯便り

□ 讀書を考察と深思との時になりました。幾らか考へさせられる様な記事の多い「地球」を出したく思ひましたが、未だ編輯同人の或者は遠い旅から歸つて來なかつたり、或は夏の活躍の跡で休養の時が欲しかつたりしたので、讀書慾に燃れてゐる方々の御満足を買ひ得ないのは甚だ残念なことであります。十一月號には此の期待を満したく、一層努力します。

□ 第二巻初頭の温泉號はそれが贅澤なところも考へられる遊山に關係を持つたものであるにも係らず、江湖の賞費を博したことは地球學界に取りましては地球の民衆化に一歩を進め得た。

云ふ點で自ら慶賀して居る次第であります。第三巻の一號即ち明年の一月號も亦特に「海岸號」とし倍大の「地球」を發刊する豫定であります。海岸の自然地學的研究を骨子として之に添ふるに海岸を彩る動植物の生息進んでは人文と海岸との交綫に關する記事を掲げたいと思ひます。是等に關する學團員の御研究や寫眞の御投稿を切に希望します。御投稿の期日は十一月十五日締切と致します。

□ 質疑應答に掲ぐべき御質問が學團員のみならず團員外の地球購讀者から殺到し現に編輯者の机上には質疑の端書や手紙が山積されて居ります。然し其の多數は誌上で御答へすべく餘りに局地的であつたり或はあまりに周知の事であつたり致します。それでかゝる質疑は質問の方に直接に御返答を出したいと思ふのであります。處が質疑の多くは御宿所及び御姓名のないものが少なくありません。かういふ御質疑に對しては終に應答の手がないことになり質疑者の意にそふことが不可能となります。段以上の理由で質疑者は必ず住所姓名を明記されることを規定したいと思います。猶ほ直接回答の便を計つて往復端書を御用ひになることを望みます。實は當學團は現在に於ては何等の資金をも有せざる無産團體であります。所有するものは唯地學を民衆化し、この面白い學問を多くの方が理解されて、職業以外金銭以外、所謂生計以外に喜びの樂土を我が「地球」上に御獲得になるのを望む耿耿の心のみであります。我が「地球」が一舉して日本地學界を風靡したのも是であるが爲めであると考へられます。